

# 「光について」

ヨハネ 3:17~36 より

## 1. 世

3:17 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

3:18 御子を信じる者はさばかれぬ。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったため、すでにさばかれている。

「世」という日本語が持つ言葉の概念では、どうしてもこの世、現世、この世界、この時代となってしまいます。しかしヘブル語では、オラーム(אֵלָם)で「永続、永遠、昔」を意味する言葉が使われており、世に対する捉え方が大きく違うことが解ります。つまり神が御子をこの世、この時代、この世界に遣わされたのではなく、「永遠の昔」に遣わされたということになり、これは天地創造の御業を御子にお任せになったことを意味していると考えられます。そしてそれは御子を信じる者が救われるためですが、御子による救いとは一回限りのものではなく、継続、永続するものです。ですから「世が救われる」とは「永遠に救われる」永遠に救われた状態であり続けることを意味していると考えられます。ですから御子を信じない者に下されるさばきもまた然り、永遠にさばかれる、永続してさばかれ続けるので、御子を信じない者が救われることは永遠にありえません。

## 2. 光とやみ

3:19 そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行いが悪かったからである。

このみことばをより深く理解するには、光とやみが何であるかを理解する必要があります。ヘブル語で見ましょう。まず光はオール(אור)です。

- ・アーレフ(א)…雄牛を象った、直接的に神を表す文字です。第一、初めという意味もあります。
- ・ヴァーヴ(ו)…釘を象った文字です。そしてこの釘は下、すなわち地に向かっています。天幕を大地にしっかりと固定させるために釘は用いられました。つまりヴァーヴには揺るがない、固定された、決定した、定められたものという意味があると考えられます。
- ・レーシュ(ר)…頭を象った文字です。思考、考え、計画という意味があります。

これら三つの文字の持つ意味を合わせると「初めに神が固定した、決定した考え、計画」という意味がオールにはあると考えられます。創世記 1:2 の「光があれば」の光もまたオールです。この光は太陽や星の光ではなく、神様の姿がパッと輝いたというものでもなく、目に見えない神様の、目に見えない光であり、神様が天地創造からの全てのご計画を揺るがないものとして定められた、地に打ち立てられた、それがオール、光の正体であると考えられます。

次にやみについて考えます。はホシェフ(חשך)といいます。

- ・ヘット(𐤇)…柵、塀を象った文字です。柵は内と外と隔てる、区切るためのものです。限界、境界、断絶などの意味があると考えられます。
- ・シーン(𐤑)…歯を象った文字です。噛む、味わうという意义があり、形あるもの、身体という意义もあります。このシーンは神の形、身体を意味し、一方スィーン(𐤒)は人のそれを表しています。
- ・カフ(𐤊)…掌を象った文字です。受け取る、捕まえる、捉える、適用するという意义があります。

これら三つの文字を合わせると「神の身体、御手をさえぎる柵」、「神を味わい、賜物を受け取ることからの隔たり、断絶」を意味していると考えられます。

### 3. 悪

光が世に来ている、つまり神様のご計画が永遠の昔に揺るがないものとして定められたのに、やみすなわちその神様のご計画を断絶、拒絶した人々のことが記されています。その理由は、人々の行いが「悪かった」からだと記されていますが、何が悪かったのでしょうか。そもそも悪いとは、「悪」とは一体何でしょうか。ヘブル語のラ(𐤌)がそれにあたる言葉です。頭、思考を意味するレーシュ(𐤋)と、目、見ることを意味するアイ(𐤀)によって成り立つ言葉です。「目で見て考える」こと、また「目をかしらとする、目に従う、見えるものに支配される」これがラを持つ概念です。自分の目で見たもの、見えるものによって考える、判断する生き方です。つまり目に見えるものしか認めない、信じない考え方が悪だということです。

あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。(創世記 3:5)

目という言葉が聖書で最初に使われるのがこの箇所です。これは神様の言葉ではありません。サタン言葉です。「目が開かれる」という表現は、一見素晴らしいことのように感じられますが、もともとは人間がサタンに聞き従った結果生まれた言葉です。目に見えない神様に従うのではなく、目に見えるものに従う、左右される、影響を受ける、支配されることが悪だと聖書は言うのです。見えるものと記されていますが、これは五感を象徴するものと考えべきです。つまりこの肉体の機能で感じられるものだけに捕らわれた考え方、生き方が悪なのです。見えるものに惑わされてはならないことを、聖書は再三に渡って警告しています。

しかし主はサムエルに仰せられた。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。(Iサムエル 16:7)

私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。(IIコリント 4:18)

信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。(ヘブル 11:1)

3:20 悪いことをする者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。

悪、ラすなわち見えるものに支配されている者は、光、オールすなわち目に見えない神様のご計画を受け入れません。「恐れて」とありますが、これは恐れる対象を受け入れない、信頼していない表れであり、また自分で自分を守ろうとする気持ち「私は私のものだ」という気持ちの表れです。要するに誰かの言いなりになりたくない、それがたとえ神様でも聞き従いたくない、だから光オールの方に来ないのです。

#### 4. 真理

3:21 しかし、真理を行う者は、光のほうに来る。その行いが神にあってなされたことが明らかにされるためである。

悪とは逆に、真理は光に向かいます。つまり真理は、光と同じ目的を持っているということです。光をより深く知るにはこの真理についても知る必要があります。真理はエメト(אמת)といいます。この真理もヘブル語から考えてみましょう。

- ・アーレフ(א)…神を直接的に表す文字です。初めという意味もあります。
- ・メム(מ)…水を象った文字です。水は天地創造の前から存在していました(創世記 1:2)。
- ・ターヴ(ת)…しるし、烙印、刻印を象った文字です。選びという意味があり、またアーレフに対してターヴは終わり、完成を意味する文字でもあります。

これら三つの文字の意味を合わせると「天地創造の前から、永遠の昔から存在する神様の選び」となります。つまり真理を行う者とは神様に選ばれた者、神様のご計画を遂行する者です。そしてそのご計画の内容が、エメトが聖書で最初に使われた出来事に記されています。

そうして私はひざまずき、主を礼拝し、私の主人アブラハムの神、主を賛美しました。主は私の主人の兄弟の娘を、主人の息子にめとるために、私を正しい道に導いてくださったのです。(創世記 24:48)

この「正しい道」と訳されているのが聖書でエメトが最初に使われた箇所です。そのエメトの目的とは、アブラハムがイサクのために、父が息子のために結婚相手、花嫁を探すことであったことが解ります。当然これは型です。すなわち父なる神様のご計画とは、御子イエシュアに花嫁を迎えることにあるということです。そのための天地創造であり、御国の完成なのです。イエシュアの花嫁とは、永遠の昔から神様にあって選ばれた者たち、イエシュアをキリスト、すなわちメシアと信じる者たち、花嫁なる教会を意味しています。

神様のご計画、オールの本質がこの結婚にあるということを、いち早く理解した人物がバプテスマのヨハネです。彼はイエシュアのもとに多くの人が集う様子を見てこう言っています。

#### 5. すぐれた人

3:29 花嫁を迎える者は花婿です。そこにおいて、花婿のことばに耳を傾けているその友人は、花婿の声を聞いて

で大いに喜びます。それで、私もその喜びで満たされているのです。

3:30 あの方は盛んになり私は衰えなければなりません。」

一方イエシュアは、バプテスマのヨハネについてこう表現しています。

まことに、あなたがたに告げます。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。(マタイ 11:11)

いかにヨハネがすぐれていたかがヨハネ 3:29 節で解ります。ヨハネは「キリストの前に遣わされた者」すなわち旧約聖書の時代の預言者である自分の存在と役割をしっかりと理解していました。しかし旧約の預言者たちやアブラハム、モーセ、ダビデといった者たちが、断片的にしか理解していなかった神様のご計画が、いかなるものであるのかを正確に理解していました。すなわち花婿と花嫁、神様のご計画が結婚に表されるものであることをヨハネは理解していたのです。聖書の中でイエシュアより先に神様のご計画を結婚にたとえた人物は、このヨハネ以外にはありません。そしてヨハネは、自分は花婿の友人であると理解して、この結婚を大いに喜んでいるのです。このようにバプテスマのヨハネという人物は、神様のご計画の本質を理解し、かつそれをイエシュアの中に見出し、心からそれを喜び迎える者だったのです。

それだけにとどまらず、ヨハネがいかに深くイエシュアについて理解していたかが次に記されています。

3:31 上から来る方は、すべてのものの上におられ、地から出る者は地に属し、地のことばを話す。天から来る方は、すべてのものの上におられる。

花婿であるイエシュアは、上から、天から来られる方、そしてすべてのものの上におられた方であるということをもヨハネは理解していました。

3:32 この方は見たこと、また聞いたことをあかしされるが、だれもそのあかしを受け入れない。

イエシュアはあかしされます。しかしそれはご自分についてではなくて、ご自分が見たもの、聞かされたものについてです。それはすなわち神様が描いた絵、VISION を見たのであり、そのご計画の全てを聞かされたということです。

3:33 そのあかしを受け入れた者は、神は真実であるということに確認の印を押したのである。

そのイエシュアのあかし、すなわち神様のご計画を受け入れることが、神は「真実」、ヘブル語でアーメン (אָמֵן)、いわゆるアーメンという祈りの告白「神様を信じる、信じます」ということです。

3:34 神がお遣わしになった方は、神のことばを話される。神が御霊を無限に与えられるからである。

3:35 父は御子を愛しておられ、万物を御子の手にお渡しになった。

イエシュアは、父なる神様がお遣わしになった神の御子であり、万物を創造された方であり、父が愛する、アーハヴ(אָהַב), その御国のご計画そのものであることをヨハネは理解していました。

3:36 御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。

そして御子を信じない者、すなわちイエシュアのあかし、神様のご計画を受け入れない者に対する神の怒り、裁きも理解していました。

これだけの情報量を、イエシュアが現れる前の人、すなわち旧約の預言者であるヨハネが理解していたというのは驚異的です。なぜ彼がこれだけの知識を持つことができたのか。イエシュアも認める人類史上最もすぐれた人物は、いかにしてこれだけの真理を理解できたのか、その理由は、彼の名前が意味するように「神の恵み」という他ないのかもしれませんが。しかし神様が、人間の優劣、どれくらい優れているかという基準を、その人が理解している神様に関する、そのご計画に関する知識の量で判断されるのは、聖書全体を見ても確かなようです。ですから私たちはもっとよく知らねばなりません。「求めなさい、そうすれば与えられます」(マタイ 7:7) というみことばがありますが、この神様のご計画である御国については、もっと過激な表現が記されています。

マタイ

11:11 まことに、あなたがたに告げます。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。しかも、天の御国の一番小さい者でも、彼より偉大です。

11:12 バプテスマのヨハネの日以来今日まで、天の御国は激しく攻められています。そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています

この神様のご計画である「御国」を知るには、「求める」程度では得られません。「激しく攻める」ことで得られるものであることが解ります。バプテスマのヨハネの神様のご計画に関するこのすぐれた理解は、彼の「激しく攻める」ような探究心に裏付けられていると考えられます。「荒野で叫ぶ声」は神様の通られる道を整え、平らにしました。すなわち神様のご計画をまっすぐに理解できるようにさせたのです。

荒野に呼ばわる者の声がする。「主の道を整えよ。荒地で、私たちの神のために、大路を平らにせよ。(イザヤ 40:3)